

～第15回となる伴奏講座を終えて～
6月23日(土)～24日(日) 会場：星槎高尾キャンパス

■初級教室（講師のまとめ）

演奏とは音楽を奏でること全般をいう。
伴奏とは主旋律者（歌手など）に対し副次的な演奏をする。
主に和音を演奏し、和声的に音楽を充足する役割である。
時に主奏と同等、またはそれ以上の役割を演じる。

初級教室では「三百六十五歩のマーチ」を題材にしました。ウンチクより弾いて感じていただこうと思い、まずアコーディオンで弾いてもらいました。

参加の方は二列に向かい合って座り、「歌う」と「伴奏する」を交互に行い、感想を述べあいました。伴奏が歌いやすいか？歌い手の気持ちを知るのは大切なことですね。笑いあり、なるほどと思わされることもあり私も勉強になりました。

歌いやすい伴奏とは…まず安定したリズムで前奏を行うことです。その楽曲のインシアチブを握っているのは正に「伴奏者」なのです。

歌に入ると右手の鍵盤はコードでジャッジャッと弾きます。コードを弾くことが必要になります。メロディは歌い手におまかせします（この時は歌い手が主人公です）

この曲はC調なのでほとんどCとGとFコードを弾きます。いわゆる3（スリー）コードです。皆さんはCがドミソ、Gがソシレ、Fがファラドの長三和音は納得できていましたが右手で弾く際、鍵盤の移動が大変なのでC→ドミソ、G→シレソ、F→ドファラのようになるべく近くで演奏できると良いとアドバイス。そこで必要なのはコードを転回する練習です。ドミソ→ミソド→ソドミと鍵盤をペタペタと這うように練習すると良いです。その練習を色々な

調でやってみる。歌は色々な調性がありますからシャープ、フラットが4つまでの調をチャレンジしていただくよう、スケールと3コードの練習表を宿題にしました。

それぞれの調に主三和音と副三和音があり、主和音I、属和音V、下屬和音IVの特性も少しですがお話ししました。

今年の初級の皆さんは意欲があり、発表の時にはD調の「知床旅情」にもチャレンジしました。情感が伝わるとも素敵な前奏でした。

二日目の発表会で弾いた「三百六十五歩のマーチ」はとてもハツラツとした伴奏でした。

中級クラスの皆さんに歌っていただき一生懸命伴奏した後の笑顔は素敵でした。ぜひ色々なところで実践してください。失敗の数が上手くなる秘訣です。

初級講師 橋本千香子



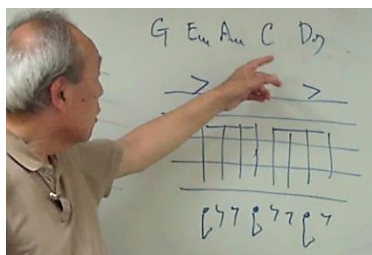
橋本教室発表の様子（聴く側が歌い教室生は伴奏の実践）

■参加者から見た池田教室の様子

レジメに沿って話をされたけれども、最初に言われたことはその心構えの話で、私たちがアコーディオンを練習するときって、譜面にメロディーがあって、コードが付いていてそれを弾く練習が多いけれども、そういう練習とはかなり違う努力をしないと伴奏にはならないという話でした。

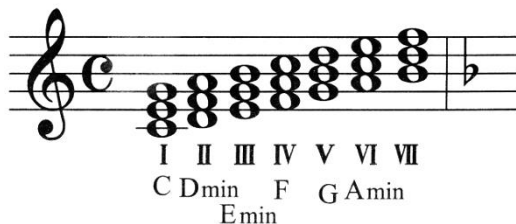
講義が進んでいくとその心構えの意味が理解できるようになります。例えば、歌い手と一緒に単に音を鳴らしていればよいという存在ではないこと。歌い手との関係を作ることが全体の音楽を生き生きさせること。

《うたの伴奏で音楽の三要素を考えてみる》・・・まずメロディーがあってそれを歌う人がいる。(旋律の役割)次にリズムがあって、そして和声があると言われているけれども、「伴奏にとってリズムぐらい大事なことはない」とリズムの大切さを強調されていました。三拍子のリズムでも、どこに拍を置くかで、ロシアワルツになったり、シャンソンになったり、ウィンナワルツになったり、マズルカやポロネーズになったりと実演されました。四拍子の場合でも、これを八つに分けたエイトビートのリズム感に一人一人挑戦してみたけれども思うようには弾けませんでした。



リズムの次は和声の話です。旋律があってリズムがあって和声。で、コードの話へと進みます。主にハ長調を例に話されました。

レジメの資料を見ながら、主三和音（IとIVとV）はメジャーで、副三和音（IIと



IIIとVI)がマイナー。この6個は、根音（一番下の音）から一番上の音までは全て完全五度だけれども、まん中の三度が根音に対して長三度（全音+全音）半音が1個も入っていないものをメジャーコードといい、「II」のように半音が1個入っているものをマイナーコードと呼ぶことをなりました。そうして、伴奏するときはこの和音を使うことが多いので、コードの移動がしやすいようにそれぞれのコードの転回形を覚えることが要求されること。例えば「ドミソ」を弾いて次に「F」って言われたときに「ファラド」を抑えるのは遠いので、「ドファラ」と抑えた方が指の動きが楽です、そのためにはコードの転回形がパツと浮かぶことが求められる。で、この転回形に馴れる練習方法としてハ調を例に「ドミソド」から順に半音ずつ長音階で上へ鳴らしていく練習を勧められました。練習の初めに必ずこのスケールをやること。これをやることで、指が覚えるのと1オクターブの感覚も覚えるので是非お勧めですとのことでした。コードの転回形も楽器を持って各自弾いてみました。

《伴奏の形へと進みます》・・・メロディーは大事な役割だからそれはそれで伴奏の1つの形なので弾いていいんだけど、歌い手がいるっていうことを意識しながら、どういう関係をつくるか考えて弾いて欲しいということでした。

まず、リズムだけの伴奏。例えば「箱根の山」このようにリズムをきちっと提供できればメロディを弾かなくても歌えます。この生き生きとしたリズムを蛇腹を使って表現できるかどうかということ。リ

リズムをきちんと提供して和音だけで伴奏する。そのためにもコードを覚えること。右手でコードを弾いて全体でリズムを付ける。それが伴奏の基本とのことです。

まずは基本の話から、そこから発展してアルペジオ（分散和音）同時に押さえる練習をした和音を1音1音分けて弾く伴奏の形「ふるさと」を例に実践、曲が柔らかい感じになります。

次の「オブリガードとヴァリエーション」では「神田川」を例にメロディーと違う旋律を上手く使っている例を紹介され、「合いの手」では「ともしび」を例に、メロディーとのやり取りも伴奏の形態としてあることを学びました。

一通りレジメに沿って話された後は、コードの付いていない曲（資料の中に「希望」「若者たち」「バラはあこがれ」「白いブランコ」などメロディーだけの譜面が用意されていた）の中から各自曲を選んでコードを付ける練習です。二日目は、各自コードを付けた譜面に伴奏を付けて弾けるようにするところまで進む予定でしたが、時間が足りなくなりコードを付けるところまでで終わってしまいました。

講師の池田氏から一言・・・音楽には、メ

ロディがあって、リズムがあって、和声がある。で、メロディは歌ってくれたりするので、それは基本的には弾かなくていいよと思えば、あとはリズムと和声。

音楽にはリズムがある。同じ三拍子でもいろんな民族性がある、拍がどこにあるかで世界に様々な固有のリズムがあるので、いい音楽をたくさん聴いて、そのことを解って、その音楽らしさを蛇腹で表現すること。そこまで踏み込んで勉強すると豊かな伴奏ができる。

また、和音の考え方というところでは、和音を変えると歌う人の気分も変わる、そういうおもしろさも勉強してもらいました。伴奏ができるようになるには、皆さんが独奏の練習でしている努力とはまた違った努力が必要なことを理解していただけたのではないかと思います。

まずは僕が提案した半音ずつ上がっていくコードのスケールを是非日常の練習の中に取り入れてみてください。



■毎回楽しい夕食後の交流会！



飛び入りで演奏

「青春」「翼をください」に振りをつけて歌う▶



■一言感想から

◎和音が変わると曲の感じも変わることがわかったので、譜面を見て何の和音が使えるのかも一度頭に入れてできるところでやってみたい。

◎メロディ中心だったけれども、これはCだな、Fだなんてわかれば楽しくなると思えたので新しい目標ができました。

◎橋本教室でしたけれども、伴奏に「コード奏」っていうのがあるという話とその実践ができてよかった。

◎伴奏って奥が深いなあということがわかりました。弾く機会はあるのでこれから学んでいきたいと思いました。

◎今回でいえばせっかくアコーディオン



を持ってきているので、僕のクラスの人達にはもっと弾く機会をつくってあげたかった。伝えたいことが山ほどあるもんだからついついしゃべってしまった。反省というか、そんな気持ちです。それと、伴奏したいっていう思いが強いんだなあいつも思うので、それにどう応えるかが1つの課題だと思っています。いつも反省しながら次はもっといい講座ができればいいなあと思っています。(池田講師)

■おまけ

二日目の朝食後、15分ほどでしたけれどもミニ解体ショー（楽器の中をのぞいてみました）解説は池田講師



中を見るのは初めての人も 最後に記念写真(他に1名、1日目で帰られた方がいました)